









門木  
辭  
卷

倭字古今通例全書卷七

自安至美

安  
又阿斐り

安斐あ斐わ  
又阿斐り

乾坤 あさなゆふを朝夕 あさなゆふ  
トモ

あさなゆふを朝夕 あさなゆふ  
トモ 黎明 又暹明氏  
又且日氏

ありあけ 有明 又朧玉篇註日月夜有明也又字彙註三月落有明之  
トアリ附ありあけれやまー山信濃国ノ名所ナリ

あまねごと 天潢 又天河又銀河又天潢氏附あまねごとがら天安河  
邊神代卷ニ又根州ニ天河ト云所アリ又河内国交野ノ  
天川ニ三星崇ル社アリ

あめのやへぐも 天八重雲 中臣  
稜ニ

あしゆき 沫雪 万葉ニ附あしゆきト訓ス  
又あし淡あしゆきトモ訓ス

あしゆき 雷 アゲダレ氏附あまごひ雲雨ヲ乞  
ナリ又あまごひトモ訓ス

川二



あさうなづら

滄溟

日本紀ニハ滄海之原ノ四字ヲヨム  
土佐日記ニあさうなづらナリ

あまれいそ

天石窟

天照太神ノ御室ノ  
磐戸ハ其門戸ナリ

あざ戸

東

又吾妻又遑都ニ附あづまや  
四阿屋 東国家作ナリ 下学集ニ

あづら

射塚

或作塚又作塚非ノ頃倭ニハアツキト訓ス愚案ニ訓母  
案土ナルベシ是ヲ以射ヲ試壁ハ案文案書ト云カ如  
昔ハ淡海ト書先代旧事記又古事記ニハ近淡海ト

あふれん

近江國

書テちよとあふれんと訓ス或記ニチカツアツミトモ

あうちう

奥州

陸奥國ノ古訓ニチノオク又ミチノク又ムツノク  
又ムツノクニトモ皆通テナリ

あゝれん

阿波國

旧事記及神代卷ニ粟國トアリ附あゝれんノあること  
一鳴門又同訓ニ安房國々史ニ云養老二年五月

自割上總國四  
郡ヲ置之

あさひる

朝夷

安房郡名  
人ノ姓ニハ比奈

あいに

秋田

出羽郡名又人ノ姓一ノ城介アリ  
又同訓ニ英多美作郡名ナリ

あゆは

愛甲

相模郡名  
但須俣訓

あま

天羽

上總郡名俗  
アニフト云

あしぢま

淡路島

旧事記ニ淡道トアリ神代口訣ニ作吾恥ニ  
日本紀ニ云此島最初ニ庄スル由附一ノ迫門

あふみ

會見

伯耆  
郡名

あんと

碧江

河内郡名文  
字并訓須俣

あひづ

會津

陸奥  
郡名

あふみ

足羽

越前郡名  
又神名帳ニ

あぐぬ

安谷院

洛陽ニ  
アリ

あふみ

足羽

越前郡名  
又神名帳ニ

あひぢま

姉輪松

出羽ノ名所ニちぢまのあひぢまト  
ヨメルハ出羽陸奥一國ノ時ナリ



あさぬ

青山嶺 大和名所

あふ 俗アント云

安武 長門郡名

あふらぬぐ

阿武浪川

陸奥郡名又名所或書作逢浪  
新古に於てあふらぬぐの字あり

あふらぬ あふらぬ

青草

美濃名所  
或人云常用

あふらぬ

粟田山

山城名所

附あふらぬ

江州ノ名所後撰ニモ云々して  
あふらぬの森れあふらぬ

あふらぬ

逢坂

或ハ作相坂近江ノ名所ナリ  
又ノ山又ノ山ノ関皆ノ所

あふらぬ

阿波手

尾張ノ名所ノ浦ノ社  
社皆一所ナリ

あづさけら

梓杣

近江ノ名所藻塩草及勅撰名所抄又宗祇ガ名所  
方角等主江州ノ由八雲御抄ニ美濃國

あさむね

淺水

摂津ニアリ催馬楽謡物ニあさむねトアリ又越前ニ  
アサヅハニシノ橋歌ニあさむねト云々

ノ一ハ呼時ト云在所  
アリ玉江モ同所ノ由

あひせが

會瀬川

陸奥名所

あさむね

新居里

近江名所新千三俊光いあにゆらまうら  
これあさむねのさうハトヨメリ又あさむね荒蘭

崎ハ武藏名所續後撰ニ家長  
白依のあさむねのさう

あさむね

飛鳥井

山城愛宕郡ニアリ又あさむねノ川ト云アリ  
又明日香河原庄云是ハ大和国高市郡ナリ

あさむね

憶原

日本紀曰小戸橋ノ一  
在干日向國ニ陽神後ニ主所

あさむね

縣井戸

山城國愛宕郡又ノ宮アリ拾芥云  
井戸殿又ノ一糸北東洞院西角

あさむね

青羽山

大和國芳林ニ近シ常ニアラミ子ト云或ハアラバ山ト  
云續後拾水多れ青羽の屋まはるの



氣形 **あひかうせんわり** 安康天皇 二十一代あまの

**あそめあそん** 赤染衛門 榮花物語ノ作者尤歌人之主君ニ説先祖亦ニ説之後拾遺ニあそりてノ名歌アリ詞書

中、関白密 通ノヨシ **あふこ** 相見 盃工之金岡之 子除目成文ノ

抄讚岐少目從八位下巨勢朝臣昌泰二年二月除目 執筆時平公ト云源氏繪合ニ忍ハこせのトアリ

**あまふ** あまト斗モ 穴生 石切ノ **あまよりご** あまト斗モ 海人 又海士又延登夫 俱ニ不詳須俵

ニ白水郎トカケリ附あまれをとめこトイ 乙女子俊成歌いり此傳のあま乃をとめこ

**あひよめ** 姉名曰 **あひびこ** 兩替也

**あひやけ** 相舅 東鑑三 十二ニ **あす** 主 アルハ為持シハ 三ウノ音ノ略

**あふもろし** 押領使 国司之 外置之 **あきさしひ** 古書ニ志の不用 清旨 順倭ニ俗ニ 云ソコヒ

**あをひとごさ** 蒼生 民ヲ云之日本紀ニヒトリグサ 正訓ス尚書曰至海隅トイ

**あをさあひ** 青侍 附青 女房 **あづまろし** 東豎子 女官 ナリ

**あまねたやく** 耐薰 或人問羅山 答云トイ **あひぐら** 齧辰骨 順倭注曰口 張齒見也

**あゝるえむま** 驢馬 又蹇馬 トモ **あそむこ** 青鶴 多識ニ又黃褐 候三字拾遺ニ

**あふび** 鸚鵡 上字声アウシウフ相通礼記曲礼トイ能言不離飛 鳥トイハ鳥之慧者 隋蜀嶺南皆有之 又枕草子ニ

云ここあのとれ 多れもあふび **あそたり** アソタカトヨム 白鷹

**あはさぎ** 鷓鴣 多識ニ 出 **あふこごり** 合虎鳥 註ハリ ノ字ニ



あぢび

列鳥

未詳歌<sub>ハ</sub>あぢ  
の村多トヨメリ

あいご

愛鳩

下学ニ  
未詳

あひふ

あひふ

鷓鴣

玉篇註<sub>ニ</sub>鷓鴣也  
字彙註<sub>ニ</sub>鷓母也

あまふい

尼鯛魚

未詳

あぢ

鮫

又鮫

あゑび

石決明

本州ニ名  
鮫魚字彙

及頃倭<sub>ニ</sub>鮫ノ字説文ニ海魚トアリ俗鮑トカクハ誤<sub>ニ</sub>鮑ハ  
コノシロク又草決明アリエビスグサ又イタチグサト訓ス共ニ主  
朝旨<sub>ニ</sub>故ニ

鮠

カハカメ  
トモ

あとしこ

鮫

大ヲ鱈魚ト云  
小ヲ青魚ト云

あゑ

鼈

カハカメ  
トモ

あんがり

鮫

未詳

あかざい

魁蛤

別録<sub>ニ</sub>俗  
云赤貝

あはぐら

螻蛄

礼記七十二侯  
頃倭ニ蛙蝸

あとし

土鴨

塙囊

あとし

螟蛉

毛註<sub>ニ</sub>蒼虫之  
註<sub>ニ</sub>字未安

あとしん

胡梨

頃倭<sub>ニ</sub>附あとしん<sub>ニ</sub>赤卒  
同書註曰赤小蜻蜒也

あぢ

棟

作棟俗歳時記曰凡一年中花信風二十四番始<sub>ニ</sub>干梅花  
終<sub>ニ</sub>干棟花<sub>ニ</sub>云云又頃倭<sub>ニ</sub>云雲見草子以<sub>テ</sub>可洗<sub>ニ</sub>衣也新古<sub>ニ</sub>

あひむいせら相生松

あをわざ

青柳

作柳俗<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>又註物ノ名<sub>ニ</sub>附あを  
やをぎ獨揺柳又かんやをぎ柳

あんず

杏

俗<sub>ニ</sub>云カラ  
モモ

あんき

あんき

檉

頃倭<sub>ニ</sub>

あうちやく

鶯宿梅

西京<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>シラ村上帝ノ時清涼殿梅カレシ跡<sub>ニ</sub>ウツナル主女<sub>ニ</sub>貴之サ  
短尺ヲ付和<sub>ニ</sub>れ<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>か<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>じ<sub>ニ</sub>き<sub>ニ</sub>宿<sub>ニ</sub>く<sub>ニ</sub>く<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>く<sub>ニ</sub>く<sub>ニ</sub>み<sub>ニ</sub>ん<sub>ニ</sub>大<sub>ニ</sub>鏡<sub>ニ</sub>

あうんだう

巴旦杏

綱目<sub>ニ</sub>

あきほじ

山榴

ツジニ似タ  
ル故ノ名

あし

粟

作粟俗五穀ノ惣名<sub>ニ</sub>附あし<sub>ニ</sub>あし  
辺米又あし<sub>ニ</sub>あし<sub>ニ</sub>禾ノ字



あつらひむぎ

積麥 作麦俗  
本州ニ

あづき

小豆 赤豆  
トモ

あさねを

麻苧

あそむら

靑族 草木ノ  
色ニ云

あぢさい ウツクハ

紫陽花 自氏文集ニ  
又一草氏

あいさ

苻 詩經ニ又  
みノ字ニ

あさぢふ

淺茅生 又一  
原

あさぢか

牽牛 俗ニ云朝顔  
但二種アリ

あか

藍

作藍俗附つゝきあか木一又たてあか苳多一又あかぢ  
澱又沍氏荀子曰青出之藍而青於藍ト

あそむ

蔓菁 又蕪菁  
トモ

あをあそ アカサトモ

灰菟 又藜共  
本州ニ

あそむら

防已

あがい

葦牙 日本  
紀ニ

あまぢく

甘葛

あふい 此訓傳アリ

葵

異名衛足字彙註曰一獨能衛其足ト又一丈紅トモ云  
附かあふい蜀一古今物名かあふいあふいはあふい

あとのり

陟致

俗青苔古書ニあそヲ  
あそトアリ不用之ヲ

服器

ありせ

拾

あせぬい ぬい

汗拭 又云フ  
腕巾ト

あつらひむら

赤大口

東帯色目曰生平絹紅ニ染テ用之ヲ  
裝束ニハ濃生ノ袴也ト

あねれこうらき

藍小懸

又一打衣氏東帯色目曰小打衣ハ衣ノ上ニ單  
ノ上ニ打衣ウキキノ上ニ表衣表衣ノ上ニ小掛其上  
袴ヲ著スルノ長サ小袖トヒトシ中陪ウフアリ  
寸法ハ次第ニ上ニ著スルヲメラスナリト

あふらむら

棟末濃

表薄色  
裏青色

あそむら

靑摺

小忌ノ一ノ  
とノ字ニ未ダ



附あまにびー鈍  
衣ノ色ナリ  
あ〜〜  
麻布 古語拾遺ニ

あをを  
合緒 たるれとあををに  
よめてむとくねん

あえもの  
將酉 又和又癩良アユル氏訓ス又あえもの齋  
アエシホ氏論語曰不得其トツ不食

あをまぶさき  
漬柿 作柿作柿共非  
作柿俗又淡柿  
あふよう  
阿芙蓉 倭訓ケ  
シノシル

あさぎのぬ  
朝餉 又一之間清涼  
殿内在南方  
あさぢぢけ  
朝生酒

あへもの  
脯 作脯同乾魚之後醍醐天皇隱岐国ヨリ船上(渡御ノ時  
アモク下ニカクレ玉フー大平記ニ見タリ

あどか  
篲 野人荷擔スル器  
ナリ論語ニモ出  
あふこ  
拐 音カ杖ノ名之或ハ作  
栗訓又カセツエ

あどろ  
簾 ありびりぬ一屏風源氏橋姫ニ又ありら分後一車須ナノ  
卷ニ又同訓ニ一際順倭ニ又同訓竹蘆莖説文ニ註曰蘆竹  
席ニ又同訓ニ網代又  
一ノ木可依用所ニ

あまれいんをぬ天磐櫓樟船 蛭兒三郎ノ乗玉フ舟ニ又鳥ノクス舟ニ云又あまれ  
いんをぬ天石舟新古といひけりこれいんをぬて  
あをにきぎ  
青和幣 又白一訓  
ニワケ有  
あぢやまに  
青八坂瓊 三種ノ  
神器

あせり  
絡繩 田ニヒキマハス  
ナニ旧事紀  
其一之伊弉諾尊御子天明玉神所作曲玉義ニ  
其色青故此名アリト越後風土記ニ

あぶぎ  
扇 又羽妾源氏ニか  
アハクト云  
あづさゆ  
梓弓 ちづさゆとまゆ  
ニ月ヲ伊物ニ

あしを  
縁手 キツナ氏雁鳥ニ  
云順倭ニ  
あけり  
阿膠 葉名  
ナリ



あこいた

復輿

俗ニ云アノダ順倭註曰漢書註曰編竹木為輿也

あふだ

籊

土ヲ荷器ナリ俗ニ云持籠太平記二十六ニ詳シ

あをびん

竹刀

日本紀曰以ノ兒截筋トアリ又順倭註曰剪金銀薄

あふ

障泥

唐韻韓又蔽泥凡俗ニあふり或ハあほりト書共ニ非あふトキテ其理シ可考相通テ一ノ源氏浮舟ニあふ

あふりをこぎーきとトアリ

あひぐい

螺鈿

青貝是訓母

あきたふ

糞堆

順倭ニ上ノ字ツキコフ

雑事 あはぐい

扱

あてぐい

擬

又充行又一作

あふ

洗

又濯常ニニ字ノ音ヲ云

あふす

合

又獲ヲアハスルニハ翁但雁鳥ニヨリ

テ文字カハルノ根東ヲアハスルニハ勅字

あふる

和

膾ナドヲアユレナリ又壑

あふぐ

仰

作仰俗又あふのく凡仰向ト書テモ日本紀ニハ擗ノ字ヲヨム

あふる

播

又ヒルト訓ス莊子一糠眯目ニ云又簸揚ト書テモアフル

あふまひ

歩行

源氏行幸

あふをこ

瓊

あがいて

踰馬

あいらみ

挨拶

ウキウツト訓拍子ヲ取心

あがらひ

味

酸甘辛苦鹹以上五味ノ附あがらひ宜字ナリ詩之鄭風ノ訓

あまらふ

甘

又耐又賂用所ニヨルベ

あふらけ

郷食應

モテナストモ

早







あてたり 周章 わんたじ 不能

あつて 誂 てノ字ヲ除テハ あきるひ 商賣

あをばる 慢 又暖わかごう あらびひ 争 又諍又論

あらし 露顯 一字ツモ又粗外ニ又表。祝部成茂

あさい 價 此訓代シ あたり 阿答 俗アツタリ

あひび 間 又際下略 あいな 無愛 又無益

あうあはれ 款乃歌 作款俗音クワン又アウ与窾同舟歌之字彙註曰

あがふ 贖 字書註曰納 あがふ 欺 今業あきし嘲

あはさく 刺 常ニラツ あてとあふ 克行 俗宛一又ツ

あへて 敢 又あへて不古今秋部ニ杜風

あひあふ 相逢 一合リ會 あいひ 交 又間詩十

あやあいう 異哉 又大可哉 あやあう 怪 作恠俗あや

あひひ 或 略シテあひハト あい 唉 字書註曰唉

あはれむ 憐愍 一字ツモ又憫世ニわらひト書

あぢき 無為 史記及日本紀等ニアリ又一端又益ニ又旧事紀ニ

あいげり 愛樂 一行皆用所ニヨルベシ

コトナシニ庄



あうあん 殃難

あざりる

紀日本

あまたし

邊又周章

あんをん

安穩

あへりえれ

似あろ

あらくし

淡々敷

あこひび

直部人ノ姓以下

あぬろ

葦原

あまね

穴太

あふこ

蒼海

あひむ

郷食庭相庭

あんごう

安東

あまうこ

淡海

あさひる

朝比奈

左変た変さ変さ  
又佐変仇変は

**乾坤** さうてん 早天朝

さうか

祥河

河岸  
ト書

さえん

菜園

さんざう

山莊作庄俗倉

さな

澤

さうけうろ

蒼龍樓十二堂

さうし

曹司

さいじやう

齊場所在吉田此地日神樂岡社春日同神之貞觀年中藤山蔭建之地主裂表雷神二条院御

宇十部兼延始為社務職延喜式第一霹靂神  
祭三座坐山城国愛宕郡神樂岡西北アリ

さうりきもん

藻壁門大内十二

さうりんたう

相輪檜

在北叡山  
頂昔日二



神ノクリ玉ヲ御柱ノシルシニ木女伊勢宮心柱記ニ  
或書曰弘仁十二年最澄僧心柱ヲ改テ各ノ一ト

さうまう

相州 相模 国

さうら

早良 筑前郡名 又人ノ姓

さうらさ

通瑳 下總 郡名

さうら

雑太 佐渡 郡名

さうら海

相馬 下總郡名 又人ノ姓

さへき

佐伯 安藝郡名 又人ノ姓此郡

名所アリ

さうらひのうら

畷浦 和泉名所俗 誤テ作堰

さびえ

左比江 撰州 名所

さうらか

酒匂川 相州但 非名所

さくさくねも

佐波古御湯

奥州拾遺物名ニさくさくこれ みる山のみあさく

さえねぬま

沼野沼

山城名所又さえねぬま澤ノ一ト云 アリ但一所カニ名相似タリ

さほ

佐保

和州平城ニ近シ山アリ河アリ共ニ名所日本紀曰藏寶 在添上郡ト万葉我セコウランさほり此柳也又さほ

山城ニアリ

さんたふ

三塔 山門ノ東塔 西塔横川

是ヲ一ト云ナリ

さめがね

醒井

近江名所昔 日本武尊

飯自東征到伊吹山時山神化毒蛇吐氣中武尊之驚汲水 洗之而則醒呼其水曰一古事記ニ寤居清泉四字ヲサカ井ト訓ス

さいしひた

幸橋

筑前名所又伊勢国ニモアリ文字再拜橋 元長ノ百首ニいのりけを再拜れと一有

道祖神

道祖神

是旅行ニ祭ル神ノ書言故事云昔黃帝子 累系祖好遠遊死於道後人以為行神又さい

のこにヒノト書又狹井神比大已貴荒魂ト旧記又延喜式曰 狹井噬大神荒魂社五座大和三輪邊ト云歌たむけのくと氏

さほひめ

佐保姫

作姫俗春ヲ領スル神ト云旧記曰狹穗姫命 垂仁天皇皇后之附さほれだにおんノ一大臣



さいくら此にほご齋宮女御

又村上女御

さうげはるん 爪牙臣

神武天皇御宇在之

さうけつ

蒼頡

黃帝時人見鳥跡造字

さうぬ

巢父

きノ字ニ、詳ナリ

さんたう

山濤

七賢ノ内

さうじ

莊子

名周字子木宋人在戰

國之時與孟子同時隱遁而放言者也所著之書名以莊子

さうけん

相人

人相ヲ見者ク相人編神相全編三世相等ノ書アリ又相工氏云史記見タリ又源氏桐壺卷ニモ出タリ

さうじん

士

又侍又倭人氏孔子曰推二合十目一

さんざう

三藏

經律論ニ通ル者ヲ云羅

什一ノ玄弊ノ一等ナリ

さうぢぢ

里長

又一骨トモ

さうめのみぎの酒井人真

任土佐守古今作者大和物語ニモ出タリ

さうごめ

又の尾

幼婦

万葉ニ又五月乙女又五乙女

さうまき

雜職

上字書ニ又一人

さぶらう

三郎

遊仙窟ニ又玄宗皇帝童名又蛭兒

さうこうちう曹洞宗

曹山洞山元祖也名本寂洞山諱良价唐宣宗之時代僧也然而曹山者洞山之嗣子也今不言洞曹

而言曹洞者亦猶慧遠者慧持之的兄但言持遠而不言遠持之類蓋頻語使也日本曹洞之祖道元是也元諱希玄京兆人也村上天皇九代之後胤源亞相公通忠子也初叡山良顯法師之明弟貞應二年入宋于時寧宗嘉定六年也見天童淨和尚得道建長五年癸丑八月廿八日示寂云

さう

象

又作烏倭訓キヤ順倭

さな

牡鹿

又掉鹿又小男一氏又中臣後日左男鹿乃八能耳半振立天

さい

犀

字書註曰似牛堅也

さぐらいつ

敗魚







さい

摩 多識ニ音キ訓サシニ子クハ煩倭ニ作塵尾ニ軍旅ノ器之  
世ニ旄ノ字トス非之是ハタト訓ス。呉子應變第五曰凡戰之

法、畫、以旌旗幡麾為節、夜、以金鼓笳笛為節、麾左而左、  
麾右而右、下略附さいとい采、敵未詳又俗ニ再拜トカク

草子 作、雙紙、俗、一ノノ銘ヲ書フ、勅撰ノ詞草子ニハ  
端ニ書常ノ物語等ニ中ニ書ト冷泉記見タリ

さんせうれん

三笑圖

慧遠、淵明、修靜、三人ヲ一紙ニ畫ク好事者所作之  
又さんきよのつ酸吸圖ハ孔子老子釈迦是亦同斷

さくろの

忍篋

矢ニ用

さいげら

柎椀

順倭

さうそくし

梢篋子

訓ニカキ字彙註曰  
一ノハ除耳中垢者也

さうがん

象眼

彫物ニ云

さいごう

菜桶

さうれん

箏

声ニウコトハ為持之字書曰似瑟十三絃也  
枕草子ニひきぬハさうれん又源氏ニモ出タリ

さうげちやく

象牙笏

牙笏ト斗モ又木笏アリ笏ハ音ユツ煩倭ニ云板  
長一尺六寸闊三寸厚五分也今按ニ周尺ナルベシ

さいりぎん

刺鳥竿

又生忍竿ニ附さいり  
りりり

さげらう

提盒

未詳

さうり

筑籬

訓イカキ  
俗ニサルト

さど

茶匙

字彙ニ又下学集ニ今醫家ニ  
所用也訓キマスケヒ

さえ

筭

声タウ酒器又  
竹筒又樽同訓

さいづえ

鑄

鋤類  
ナリ

さどき

棧敷

上字タナ  
ト訓ス

さほ

竿

又棹又篙是  
舟ノサホニ用

さうかり

草藁

一案  
下書

さうちつ

贓物

又同訓ニ  
雜物

さうり

草履

又藪履附  
さうり履



さきざちやう

三毬打

又一一杖又爆竹神異經曰西方山中有人長一尺餘人見之則病寒熱名曰山臊以竹燒火爆竹焮有聲則驚去不來云又袖中抄云十節錄黃帝取虫尤頭毬之今毬杖是也以下略之俗云左義長不用

雑事 さづけ

投 又受朱子曰一与之受取之也

さうぢ

掃除

さらふさうひ

獲 又擗又浚用所ニヨル

さうと

閣 又措

さつり

障 又同訓ニ月水ノ二字是ハ婦人ノサハリ之又つきれさつりトモ

さんづ

三途

地獄餓鬼畜生ト云又火途血途刀途ト云附一一川歌ハハつセ川尾ワツリ川トモ

さうれい

喪禮

作喪俗又葬礼共但少異

さうそ

葬送

土葬水一火一野一

さうでう

雙調

作雖父調俗四月調子

さいさうらう

採桑老

舞舞

さんむそ

三番叟

俗三三番三猿樂始

さうがう

猿樂

源氏乙女ニさうがう

さうぬん

想夫戀

平調樂無舞平家物語ニ戀樂自シ誤トモト相府蓮之晋王儉大臣トノ家ニ蓮ヲウケ愛セシ時ノ樂ニ徒然草ニモ此トアリ

さいや

宰相

參議ノ唐名又諫議

さうざうん

左官

古今序ニ常ニサクワント云同訓ニ録在諸省上又屬在諸寮下又令史在諸目下又志在諸使諸衛下又目在諸国下

ざんちやう

雜掌

典 在太宰府



さいりょう

宰領

作支料  
非

ざうりょう

藏主

或作一司  
禪初位

さうりょう

壯年

凡二十日弱三十日一四十日強  
五十日又六七十日最也

さうむか

坂迎

関迎トモ云世人酒ヲ携テ客ヲ  
待義ト心得タルアリ委関迎下ニ

さうりょう

相生

木生火々生土々生金々生水々生木ナリ又相剋ハ  
火剋金々剋木々剋土々剋水々剋火ナリ

さいせう

最勝講

於清涼殿一王  
經ヲヨムヲ云ナリ

さうりょう

草創

下字ヲ初同  
俗云クサワケ

さうりょう

早謠

作歌同催馬  
兼神樂哥

さうりょう

早速

又さうりょう早速心ト云源氏巴抄ニ又枕草子云ハ  
新直ゆききくぬさうりょうハ

さうりょう

閑寂

又寂實ト又古  
書さうりょうト云

さうりょう

榮

又昌古書  
さうりょうトモ

さきむら

前駈

日本紀ニ詩  
經ニ一驅

さうりょう

前

古事  
記ニ

さうりょう

近曾

東鑑ニモ所々出タリ源氏浮舟ニ  
さうりょうハ

ざん

才

声サイ源氏及  
徒然草ニ云

ざん

算用

俗作算  
非ナリ

ざん

副

我々人々等々云ノ假名ナレト  
てにぞんニモカレ故ニト書

さいりょう

幸表

上字ヲモ  
用ユ

さいりょう

幸

又貴又福又さ  
うりょう臣妾ノ

さうりょう

相論

又争  
同訓

さうりょう

候

又侍略ノ  
ソロト

さうりょう

草々

又早々又忽々ハ  
さうりょう用所アリ

さうりょう

草々

又早々又忽々ハ  
さうりょう用所アリ



さどろくろ海

没梭間

暫時ノ義ヲ云

さげさる

酒飲

又一給又さる

催馬楽ノ

さへはる

轉

又啗又縣蠻ノ字ヲ訓ス詩經ニ

呂ノ歌ニ

但鳥ノ一ニ云又あまれさづり源氏松風ニ

さんた

多

日本紀ニ又早ノ字

支

物ノつらゆるモ此字ナリ

さうよう

雜用

上字声

遮

又邀前乘ル意ナルベシ

さいこう

再興

奥ハ略シ

左遷

又拾傳日本紀ニ流離在アリ匡房歌ニささくさる方も有リ附ささくさる一道同訓ニ茶一

無正身

アルジナキ云河海ニ

さくろん

如五月蠅

ハハノ集ル意果紀

讒言

源氏柏木ニささくさるトアリ上字ささくさるト訓ス

罪

ナハ付字又呵

さくぬ

作意

同訓ニ爲

忤

一久ニ又逆忠言於耳トアリ

さくさく

造作

家屋ニ云又さくさトモ

騷

又狼籍是果紀又諫作噪同

さくさ

誘引

又柱又梧共同訓

寒

又冷又冱又聲ノサユルハ亮ノ字見詩鶴鳴之註

さくさく

騷動

是モさくト訓

爽

又冷又冱又聲ノサユルハ亮ノ字見詩鶴鳴之註

さくぬ

相違

又さくさる

吟

又呻

さんこう

相馬

今姓以下準之

等ナリ

さんこう

參和

又一候又一籠

さほよふ

吟又呻

さくま

相馬

今姓以下準之







由洗耳故而又為汚而不飲牛此事好事者說雖更不足取世人多知之仍以記可考高士傳莊子

公任 廉義公男四條權大納言之村上帝 康保三年生後一條万壽三年出家

魚養 朝野宿祿之光仁帝時人能書也空海ノ手ノ師ナリ

琴高 趙人事宗康王乘鯉彈琴者也 列仙傳今畫圖多俗キコト云

義堂 又周信ト云後小松院時僧至德三年南禪寺住持職源義滿賜公帖又キダラ虚堂ト云シ僧アリ

兄弟 訓シトト井 歸依僧

競馬 與競同賀茂騎射之五月五日左近府トリ六月右近ノ騎射之又年中行事キヒヒマトリ十月廿日之頁方

雉 又訓ニキトリ又トヤリ 字又野雉

本朝是ヲ雁鳥ノ鳥ト云他鳥ハ何ノ鳥ト名ヲ云ニ歌ハキトヨハ袖中抄ニ顯昭云考日本紀ヲキジヲハキトト云キジハ略美ト。水鏡ニ曰仁德四十二年九月始テ放鷹アリテ取雉ト

黃檗 常ニ音ヲ用 正字果倭訓カクノミ

香菓 日本紀ニ聖仁九十年春二月庚子朔天皇命田道間守常世國令采非時香菓註ト此云箇俱能未ト今謂橘是也ト

椶 木皮 祭神佛用之常

玉簪 多識ニ

桔梗 倭訓アリノヒフ

古ハキチウリト云古今集物名ニ秋ラウリ地ハウリにけと云ク多クの

きんたふ

きよやう

きんかう

ぎたう

きやうたい

きさひひま

生植 きりび

きれかこ

きやうらう

羞活 訓ウド

きげう

木 枯梗

きやうらう

香菓

きりやうらう

祭神佛

きほし

玉簪

木 枯梗



きんぼら

柘俗作柘

きりり

木棉古来俗未  
綿ト書ハ

非之字彙、註ラ可見  
又ウ

服器

きくごら

額又夾額正順倭註曰  
結帛ヲ為文線也

きくごら

麴塵袍

東帶色目曰天皇及太上皇袍之号青色賭弓  
臨時祭庭座五月競馬等用之各御袍文桐竹凡  
几。黒半臂。蕨枋御下襲表白堂裏蒲萄洙同半臂或黒  
臨時祭庭座著御夏御袍生款蕨枋御下襲或朽葉。赤色  
袍内宴著御  
唐生綾

きぢぢ

几帳

順倭曰未詳  
又古書ル丁正

きぢぢ

經儒佛

きぢぢ

二十卷正  
和二年八

月日依伏見院勅前大  
納言為兼卿撰之

きんろふ

金葉集

十卷天  
治元年

依泊河院勅後  
頼朝臣撰之

きぢぢ

起請文

諸神  
一ノスルノ

義之漢朝、昔諸侯ヲ集テ牲ヲ殺シ血ヲ啜テ其ナカラス一ヲ盟ニ  
本朝、古武内、宿祢探湯、隱謀ナキ一ヲ盟フ紙ニ書一ハ大師勸  
請、一又鎌倉ニテ貞永元年七月奉行  
評定衆一ノ一式目ニ見タリ

きぢぢ

行香

公家及出家神佛ヲ拜スル手裏ニ  
香ヲヒ子ルヲ云源氏物語ニモ出タリ

きぢぢ

枳實

葉、  
名

きぢぢ

杏仁

与上  
同

きぢぢ

檣椽

訓ム  
ツキ

きぢぢ

香匙火箸

ニ物  
ナリ

上二字ハカクサク下  
二字ハヒナナリ

きぢぢ

鏡臺

訓カミカ  
ケ順倭

きぢぢ

毬杖

又及打庄倭訓一リウキ注ニ毬打下ニアリ又和語玉剋春  
カキトク我をれたを處起くも居てもあまにくトヨルモ及打走



きこふ

龜甲

字彙曰作龜異字  
作龜俗又俗ニミツカワ

きやくたう

脚踏

俗ニ云  
キマダツ

きづる

鞞

作鞞同又  
ホダミト訓ス

ぎやうちる

擬寶珠

橋ノ具俗擬法珠  
トカク誤ナリ

きたふ

冶

鉄也  
又釧

きりじ

給事

上字音キフ  
師ニツカフル

ノ義又又饗食應ノカヨヒ也俗  
宮仕トカクハ大ニ非ナリ

きらふ

嫌

きこえ

聞

又聽

きづいて

築

一城  
ナリ

きやうふ

驚馬風

兒ノ  
病

きよらう

虚勞

作虚  
略

きよせう

虚證

又實

きんさう

金瘡

きぶ

疵

又瑕伍玉ノキズ  
又きぶつク傷

きやうむいら

傾杯樂

大食調  
ノ樂

きやうん

慶友雲

平調樂  
舞ナシ

ぎごうさん

儀同三司

寛弘年中以前内大臣藤原伊周  
叙之列大臣下大納言上ニ云

きろうぬ

刑部

周礼大司  
寇之職

きりだい

及第

上字音キフ  
漢ヨリ始ル

ぎらうがう

行幸

天子出御之仙院ハミユキ御幸音ヲ用ゴカウヒ  
諸王ハ行啓ノ音ヲ用訓ミチヒラキ

きかうでん

乞巧奠

歳時記ニ七月七日ニ星ヲニツル陽星ハイヌカヒボシ  
牽牛陰星ハタナバタツメ織女此ニツリ日本ニテ

天平七年始テ有之  
公事根源ニ

きびあ

稚

日本紀及源氏ニ  
モアリ幼少ナルヲ云

きやうが

境涯

一界トモ  
己が業

きりぢ

灸治

上ハマイト  
ト訓ス



きわん

來居

又木栖 凡きわんうりくいと等こ又きわト斗モあき  
りふ堀江の川れまきまにきわんあふん於もかし又こわ

トモ言塵集  
鷹詞ニ

きがる

器巧

甲曹旗棋ノ類凡  
武器作法ニル

ぎぢやう

議定

きんけり

吉凶

作凶俗  
又一相

きえん  
きゆる

消

又銷附けぬキユルヲ云又  
不消ヲモ云所ニヨルベシ

きめり

奇妙

附きま  
一瑞

きまひ

喜悅

きん

際

又限  
又極

きんかい

極

又穴窮又谷同訓  
毛詩云進退谷

ぎやうてん

仰天

附きやうてん  
一崇

ぎやうざうざう

行住坐臥

きんげん

聞蕩

きんかう

舊好

きやうこ

輕忽

附きやうこ  
一重

きやうぢやう

行狀

又一儀  
又一道

きやうどう

饗食應

訓モテス

きやうどう

形像

又一象

きやうげい

恭敬

きたり

祈禱

きやうやう

哭器量

又カキト訓ス  
伊物じこ

きこさひ

臍

又瀆  
又蓬

きやうげん

狂言

綺詞  
綺語

きやうげん

競

きとひるノ時と  
く附きそひり

きよらう

許容

きよらう

頃刻

きんじやう

私人ノ姓又  
一市氏

きんじやう

京

又きんじやう  
一僧

例七

廿三

例七

廿三





由変中変申変申  
遊変地

乾坤 ゆふひ

暁 夕日之附ゆふひ  
ハ夕陽白氏文集

ゆふづき

大白星 暮見干  
西九星之

又ゆふひ長庚トモ  
長庚トハ別ナリ史記天官書ヲ可考

ゆふげくよ

夕月夜

又夕附夜氏古今ニゆふくよ小食此山ニゆふひ  
附ゆふくよ夕附日又薄暮ト書テモ同訓

ゆふべ

夕

又暮又晚同訓附ゆふ終夕又ゆふされ去又曾去トモ芳葉  
又ゆふあき一暖ぬんをすけこれ申のゆふあき

ゆふだち

白雨

又暴雨俗ニ夕立トカク拾遺ニゆふだち  
あめをふる野ニ夕立ニ云ク

ゆうてい

遊庭

俗蹴鞠之場云一ト方六間或十二間四隅植松竹  
楓柳謂之四本懸毛鳥井家四隅皆植松竹由

ゆふき

結城

下總 郡名

ゆふしがき

木棉葉川

豊後 名所

名寄ニハ不勘國トアリ然氏名所方角ニ委シ續後撰ニゆふく川  
名りトすけこれゆふたて又ゆふくやまト云アリ文字夕山ニ非名所ニ只  
ユブノ山ヲ云ト新古ニ家隆ニ云ク  
こゝねぬあきれゆふく山是モユフハ山ヲ云

ゆふげやま

夕景山

未詳續古 冬ニゆふけ

山ハ豊後ニ  
山此ららの  
あきくこ

ゆづくむら

湯津波村

伊勢ノ 名所

伊勢名所記ニ湯都盤トアリ関地藏中町ヨリニ町斗北今ハ  
此里絶テナシト云云万葉ニ川と此ゆづく此村ニまむさひ

氣形

ゆじかいまんやう祐子内親王

後朱雀院皇女 歌人ナリ

ゆぎやうまやうけん遊行上人

元祖一遍上人者越智氏伊豫国河野七郎通  
廣二男之後宇多帝建治元年奉熊野神勅



立時宗創相州藤沢  
之清洋光寺云

ゆうじんりやう

幽僊法師

古今 作者



ゆき

本声イウ 猶子 註養 子下

ゆうじ

又一 勇士 者

ゆうれい

幽霊

ゆうじん

遊君 又一 女又マホ 子ト云夜夜發

頃

ゆうよ

猶豫

似象獸之 每多疑慮

故常謂遲疑

ゆうづけり

夕告鳥

雞ノ一也 又木棉附

鳥居古世上サハガシキ時ハ四境ノ祭トテ雞ニ木棉ヲ付テ四角ノ 関ニ行ニツリアリ故ニ一ト云古今ニ相及レゆつり多にあり

生植

ゆかり

柚柑

頃倭ニ云ユカン撥根 爾雅註云柚屬

榎

又杠枕草子ニゆかり

ゆきたれ

雪下折

草木ニ云 新古ニ統

壺盧

本州ニ又魯瓜 俗ニ云夕顔

服器

ゆふげ

夕食

又一 飯

ゆいげりきり

遺教經

法相宗 用之

ゆふ

木綿

作木綿誤之日本紀作木綿故神書皆作綿頃倭 本州註曰一和名由布折之多白絲者也トゆふ

一四手又一襪也ゆふたき一襪等又之の ちゆふ浪白一ゆふはぬゆふ浦瀆一等等

ゆだのつまぐ

湯津瓜櫛

日本紀所々ニ出タリ少のみなハ形を 丁一きわきしゆら此つま櫛いふは

ゆき

硫黃

頃倭作流黃註日本州疏云 石流黃焚石液也和名由乃阿波

ゆえ

油煙

作煙俗異名光煤又玄雲又 宝墨皆墨ト云



ゆき

湯桶

如此一字ヨミ一字声ヲ用ルヲユトウヨミト云  
下二東ノ字宅董切前板誤テなりトス

ゆき

結

又ゆきて縛史記ゆつとトモ  
依もてゆつとわらちまの

ゆいて

往

作往非  
又行

ゆきうら

往復

声ワラ  
フク

ゆきうら

行違

又一向  
トモ

ゆくよき

行末

又向後トモ  
訓中略テ

ゆくゑトモ又  
將來ト書テモ

ゆくゑよく

有識

又いうま  
氏一族

ゆうじろ

右筆職

東鑑ニ書  
又手書ト云

ゆけい

靱負

左右衛門左  
右兵衛ト云

ゆうぢぢ

遊字女

盤渉調  
ノ樂

ゆげ

讓

又禪ハ位ヲ  
ユツルナリ

ゆいりれ

納采

又幣納ニ俗ニ結納トカリ礼記言將爲婚必先媒妁通其言  
然後使以納其采擇之礼ト云今謂之頼物ト也

ゆうけう

遊興

ゆいごん

遺言

附一物又  
跡又誠

ゆうらう

優長

日本紀ニ書  
ト訓ス

ゆふまごい

夕轉

附ゆふまごい  
一真戀ノ詞

ゆあま

浴

無假名使俗ニゆあまト云  
源氏東屋ニゆするはあまらや

ゆうめん

宥免

ゆづり

相應

源氏ニ似  
合タラ云

ゆうく

悠々

ゆいご

由緒

ゆい

故

同訓  
所以

ゆいご

由々敷

ゆうじん

誘引

ゆうじん

優艶



ゆひ

由比 人の姓又一井  
ハゆおナリ

め

空海ノ以呂波ニ面ノ字ヲ用俗女ノ字トスルハ誤ク女ハヨミニ中華ノ  
草書面ヲめニ作ルアリ 又免変化

乾坤

めだう

馬道

須俣註日向堂道源氏桐壺ニめだうの  
戸と一カカら巴抄ニ縁ワキノ戸ナリト

めづる

梅豆羅國

火前国松浦之俗誤テツラト云来  
然正五音相通ス日本紀神功記可見

めんざう

眠藏

僧ノ寢所  
或云臥雲

氣形

めうら

妙樂

名湛然也初智顛字德安云アリ智者大師トモ云陳  
隋二代ノ帝ニ見エテ師範トナル天台ノ佛障寺ニ住ス  
仍テ天台大師正法華經ノ題号ヲ釈スルヲ玄義ト云經章ヲ釈  
スルヲ文句ト云又別ニ觀心ノ事ヲ述ルヲ摩訶止觀ト云是天台ノ  
弟子章安灌頂等記ス都テ二十卷本書ト云後一ニ玄義ヲ注ス  
ルヲ釈籤ト云文句ヲ註スルヲ疏記ト云止觀ヲ註スルヲ弘決正輔行  
記正云都テ三十卷末書ニ合テ

附めりうらん一觀 四十  
八代

三大部天台六十卷ト云トソ  
於徳天皇ノ寶龜十一年庚申七月十八日撰別勝尾寺ノ講  
堂觀音ノ像ヲ刻初之ヲ三十日ヲ成八月十八日一化觀音  
ノ月十八日ト云フ何ノ書ニモ不見一カ死日十八日ナル  
故定之ヲ云一ノ一ノ元享釈書ニ出タリ

めれ

女童

又めらう  
トモ

めい

姪

めは

名仕

めとと

夫婦

是及音ノ訓  
ト云テカハリ

ミルナリ兄弟ヲ  
ヲト井ト云類之

めらうと

囚人

罪者ナリ又  
同訓ニ名人

妾ノ類之源氏ニモめ  
らうと有和大物語モ

めら

瞽

又盲附あまひ  
清盲頌倭ニ古

列七

廿七



又

書ニミ<sub>レ</sub>トモ  
不詳口上ニ

めむま

牝馬

生植

めいけふ

莫莢

堯時知有  
數草ナリ

めい<sub>レ</sub>ト<sub>レ</sub>キ

荒蔚

順條ニ又  
天魔草也

めうが

藁荷

上字音ジマ<sub>リ</sub>順條ニハメガ  
ト訓ス前板誤テ<sub>レ</sub>ウガ

服器

めゆひこそで目結小袖

めあう

碼礪

杜詩ニアリ  
七宝ノ其一

ナリ本州金石部ニ  
馬腦トアリ

雜事

めうず

描畫

めんたう

面當

附クン多ク  
一謁

め海<sub>レ</sub>ろく

瞬

メダキ  
ナリ

めげ<sub>レ</sub>じ

珍

日本紀ニ希見  
ノ三字ヲヨム

めざまろ

寂煩

源氏  
ニモ

めぢ

目路

遠見ノ  
間ナリ

めいぼく

面目

源氏竹川ニ  
アリ

め海<sub>レ</sub>ド

睫

メクバセ  
ナリ

めあ<sub>レ</sub>ふ

目馴

古今戀花<sub>ノ</sub>ニ<sub>レ</sub>ウ<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>ふ  
ひ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>と

めいむう

名望

めみえ

西<sub>ニ</sub>え<sub>レ</sub>也

目見

めまひ

眩暈

作眩  
別字

めい<sub>レ</sub>ぼ<sub>レ</sub>う

滅亡

めあ<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>ん

妻

又娶論語ニ曰<sub>レ</sub>以<sub>テ</sub>其<sub>レ</sub>兄<sub>ノ</sub>子<sub>ヲ</sub>  
一<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>一<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>ま<sub>ト</sub>訓<sub>ハ</sub>人倫ナリ

めが<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>ひ

廻

源氏玉  
カツラニ

め<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>

豫參

伊物ニ云  
云<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>め<sub>レ</sub>所

の<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>これ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>り  
あ<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>たり<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>り

又



美変炭変み  
又俗三変ミ

乾坤 **みづのえ** 士 附ミづのと

**あうぢやう** 明星 順倭ニアカボト訓ス

**みやうき** 猛火

**みいぎん** 隈 作限非水曲

**みとびき** 水脉 附ミとびき此字一船順倭

**みづあひ** 浪

**みとれうき** 湊浮洲 又水尾

**みくしんご** 御溝 在禁中源氏梅枝ニ

ちとれ陣のミかこ  
ミろよあつてト有

**みらすぢら** 道條 附川一雲一

**みろし** 水淡 又水尾

**みぎは** 渚 又濱

**みとれう** 湊標 万葉ニハ湊字ハカリ同書水廻衡石在アリ。國史日難波江ニ始テ立テ又土佐日記ニモ一のりくとおく難波はと

きそ川尾ホ入トアリ。俗ニ云ミとエツ一水面標又云分木  
藤原行能ハ此れ境子にたてるミとレウ一今案ニ水脉標カ

**みくしんご** 御手洗川 俗ニミタラセト云名所ニ云時ハ賀茂ノ一ニ俊成歌ニ原さあつてトレ川に乳マて形ミレウニあおれを

**みやうでん** 名田 苗田ノ時 又源氏巴抄云歌舞ノ楽屋等ニテ湯水ヲノスル所ヲモ云ト

**みづむら** 水驛 言塵集日船路馭也

**みづとごら** 御厨子所 主上御膳ヲツカサドル所ニ拾芥ニ云在後涼殿西庇四位殿上人爲別當

**みづぐき** 瑞籬 註イニ 委 明朝 元朝ノ次ニ又一ノ次

ツレント云清字之代ノ名ニシシ計  
唐音ニトノフル一不穩

**みられぢく** 陸奥 中略ニテミチノクニ又ミチノクニニ或ハムツト斗モ云ナリ



みほねのくに 水穂國

中臣枝三豊芦原ノ一トアリ倭國ノ名一  
イ一正摠テハ世界ヲ指トイヘリ又日本紀作瑞穂

みづのくに 三河國

參河正國中ニ有三河曰男川  
曰豊川曰矢作川故ノ名

みえ 三重

伊勢郡名

みづら

水内

信濃郡名  
今俗ミヅラ云

みねてし 三井寺

天智天武持統三代ノ産水ヲ奉ル故此名アリト云天  
武三年大津宮建立於寺而教待和尚ヲ開山トス智

證大師附屬之ヲ  
号園城寺ト云

みね

行井

筑後郡名或  
作御一府

みやぢやま 宮地山

大名寄ニ作宮路ニ三河國トアリ後撰ニ云ウウケリ云  
升ノ見ルニミヅラ山名所方角ニ矢作ノ近所ロクキ山下有

みかたうら 三穂浦

駿河名所又作三尾作御穂附ニカレウケリ三保松  
原同所或ハウカレク多正有度郡ニ能因法師ウケ  
侯ニカレカミウケリウケリカレカミウケリカレカミウケリ

出雲國日本紀ニ又ニカレカミウケリカレカミウケリカレカミウケリ  
石室ハ紀伊ノ名所ニ

みづのくに 美豆野

山城國  
淀ノ向

大和名所名所方角ニ山城國小幡ニ近シトアリ又  
ミヅノクニノ小川不分明又ミヅノクニノ御牧ハ

みのねのくに

箕面瀧

摂州勝尾  
山ノツキ

みづのくに 三輪山

又大ニ正和名所城上郡又ミヅノクニノ山又カミ  
ミヅノクニノ神岳山正詞林探要ニ祝大物主神以杉木爲主ト

又サキニミヅノクニニミヅノクニニ  
魂奇魂モ一日本紀ニ

みづのくに

水尾

近江名所高  
島郡ニアリ

又一ノ里ハ丹波ノ内ニ山城ノ境愛宕山下昔  
清和帝此里ニ栖玉フ故ニ一ノ御門ト号ス

みづのくに 水江浦

丹後國与射郡昔此所浦嶋子往常世國三百四十餘  
年ヲ經テ飯ル雄略ヨリ天長ニ至ル委扶粟略記ニ後撰ニ

あひてたふをけりせんミヅのえれ  
ミヅのえれをけりひりけり

みのくに 葦宇

筑前名所後拾三馬内侍  
ミヅのくにの浦乃ミヅのくに



みづぐきねをく 水莖岡

江州 名所

みづのさね

美香保崎

下野 名所

**氣形** みほつひめ 三穗津姫

高皇產靈尊女大物主神、毒也口訣曰  
出雲國杵築大神、大后神社ト

みづのねをく 水尾帝

五十六代清和天皇

みやつこ

造

日本紀及先代旧事紀云云此

やつと伴一又たのらばと国一又たこれらづと神一  
又官人ト書テモ同訓ニ古語拾遺ニ藏部ト書テ同訓

みまもとのふ源順

左馬允奉男春宮藏人能登守五位  
至永觀詩誦達人類聚倭名集ヲム

みわうらなう 明靜

正二位權中納言定家卿之法名一ハ  
仁治二年八月廿日行年八十三歳ニ逝去

みやど 宮主

神祇官ニアリ

みやこ

赤子

俗若子ト書

みやひ

龍

古書ニカ  
あゝ誤カ

みづとら

ちらヒ

鳩尾

水落ニ多識ニ  
順倭ニカカ

みやうぬ

名婦

狐ノ又野行  
又野子ト云

みやけく

木兔

ヅクト  
斗モ

みぞささい

鷓鴣

又サキヒ日本紀ニアリ小鳥之下学集ニ白栖溝ニ歳  
故ニ云一ト又ささいト計ハ巧婦トカク。莊子逍遙遊

日一巢於深林  
不過一枝トアリ

みやうくろう 命々鳥

法華ニ曰  
若波安鳥

或曰共命  
鳥ノ由

みづき

躑

順倭ニ  
水鳥ニ云

みでい

鮓

東国是ヲさいト云又ミト斗訓メ  
難字順倭注ニ日似鯉魚也ト

みるくひ

淡菜

一名東海夫人  
本州俗海松喰

みづい

蚯蚓

今案ニみむ  
歌々トモ

地竜云又土龍和俗ウクロモチヲ土竜ト云  
誤クウクロモチハ鼯鼠トカク

**生植** みづな

水草

又ミナナ  
一落

みづき

苻

又筆跡  
ノイニ云



服器

みそづもの服御物

平人 不言

みん

神酒

日本紀ニ

みあへ

御郷食

旧事 記ニ

みへ

御贄

下字音 訓ニ

指大嘗會古今詞書ニモ承和ニへ或ハ元慶ノ御ヘトアリ  
何ノ国ニテモ御代ニヨリ齒固ノ餅ヲ奉ルヘトアリ其ヲ三ハ  
トハ云

ナリ

みちうえ

明衣

論五ノモ出  
タリ訓ニケシ

祭ノ時用ルユカタク常ノユカタニハ  
內衣トカリ順倭ニ見タリ

みげうき

御教書

大將軍及副將軍ノ  
云又御下文是又同然

みりたそう

密陀僧

石葉ニ  
本州ニ

みちうん

明櫛

本州ニ

みり

蜜人

又木乃伊氏本州人部ニアリ但一木乃伊ノ註出是  
ニイラト可訓似タリ俗ノ用ルニ任セ今記之ヲ

みづはき

鞆

馬ノ具順倭ニ承トアリ但訓ニツキトアリ  
又七寸尺上代手綱ノ轡付ヲ皮ニテ七寸程ニセトナリ

みづこぼり

建水

器ニ  
左傳

みりまじ

三輪組

日本紀ニハ  
岡象ノニ

みづこ

汞

音コウ又  
水銀也

みづりき

唧筒

或作唧筒  
未詳又水彈

みづれぎ

水馴棹

舟指サホニ新古神祇ニ云此川  
々々々々々々々々々々々々

みづりき

微塵

俗作微

みづれぎ

翻車

水車器ニ魏  
馬釣始作之

みらん

微塵

みづら

準繩

順倭ニハ云々ト訓ス  
盛水地ノ高低ヲ示ル具也

みらん

微塵

みづら

三絃

三味絃ヲ云琉球島ノ樂器ノ由凡百年程前ニ渡リヨ此ヲ雜書  
出寛永ノ始風流ノ奇なるヲ持三のといひトウタフ

みづら

三絃

三味絃ヲ云琉球島ノ樂器ノ由凡百年程前ニ渡リヨ此ヲ雜書  
出寛永ノ始風流ノ奇なるヲ持三のといひトウタフ



雜事 **みさか**

**操** 又字彙ニ作敷一ニハ不変ノ心ヲ云ニニハ水ノサホ之又訓アヤツル又貞字ヲニサホト訓ス

**みらど**

**水滓** 下字カス ト訓ス

**みとく**

**措身**

**みぢくろひ**

**儻** 作姿ナリ

**みとく**

**飲食** 古事記ニ

**みぢくろひ**

**瀟聲**

**みづみ**

**飲** 牛馬ニ云俊成コヨクククニ成ス

**みづみ**

**みづみ**

**自** 又親又身自凡

**みま**

**見分** 源氏ニ附一廻俗

**みま**

**合交** 日本紀神代又遵合同書

**宮仕** 倭字ニ世ニ執アツカフ故ニルス礼記曲礼ニ官ノ字ヲニヤツカヘト訓ス

**みえつ**

**みわだ**

**みしほ**

**御修法** 中字与脩同作修非之みまゆリ凡禁中ニテ正月七日ヨリ十四日ニテ行ハル承和元年ヨリ始ル

**みんかり**

**御八講** 五十代桓武天皇延暦十五年八月四日大和石淵ニ權操沙門ニ詔ノ初テ被執行之是依天皇之因忌也依此例六十二代村上天皇就母后之因忌天皇自写法華經天曆九年正月四日天台座主内弘徽殿ニテ有其一其後毎年因忌法性寺ニテ被行之又七十二代鳥羽院御宇依菅丞相並之告天仁二年二月廿五日山城国吉祥院ニテ有八講ト云〇一トハ佛前ニ灯明香花等七種ノ飾ヲナシ天台ノ学匠法華法問八座之論議有之或二十講或三十講モ有之ト云

**みりあえ**

**道郷食祭** 六月晦日被行之ト部氏人於ニ京城四隅道上而御集鬼魅祭也

**みろ**

**察** 又窺又視共日本紀ニ又着行凡

**みろ**

**冥加** 俗ハ一ナシト云

**みわ**

**諒闇** 註リノ字ニ

**みわ**

**狼** 作狼非又妄又狼籍凡



みじか

短 又ツルト訓ス今案ニみじか  
口傳之ク今井ミジカト云時位卑

みじろ

直下 見一

みえ

見 又まみえ  
目一

みじか

満玉野 入ノ姓以  
下準之

みじの

水野

みじ

美豆

みさこ

水澤 又一江

みじ

箕輪

みたらひ

御手洗

みじ

魁尻

みね

三祖

倭字古今通例全書卷七終



